

太陽の影・ストーリーライン

井田和樹

Phase.1 【In The Island of the Border】

「これが終わったら……少し、眠りたいわ。少しでいいから……」

治外法権地帯と化した現在の海賊島・対馬を臨む女性士官・穂摘悠理の視点から物語が始まる。

任務は海上保安庁SSTとの合同作戦、対馬を拠点とする複数の武器密売組織摘発。悠理の所属する〈陸上自衛軍教導団・第13特殊電子戦術小隊〉は実戦テストを兼ねた支援との名目でSSTに追随する。

異例の極秘任務に加えて実戦を想定した装備、情報不足から来る現場の混乱、SSTとの連携のまずさなどが描かれる。

悠理たちも慣れない船での船酔い、時間のなさから起こる疲労と睡眠不足、人間関係の悪化など、万全とはほど遠い精神状態となっている。

作戦開始、とりあえずは順調に進む摘発作業、だが悠理はどこか不穏な空気を感じ取る。

島の中心部に合同部隊が到達した瞬間に突如として始まる攻撃。機関銃とロケット砲まで動員された、今までとは比べ物にならない火力と布陣に部隊は釘付けにされてしまう。

さらに後方の司令部までが迫撃砲とECM、サイバー攻撃まで交えた攻撃にさらされることで指揮系統は分断され、部隊は大混乱に陥っていく。

悠理の乗る指揮車輛もロケット砲により擱座、さらに小隊長が対物ライフルによる狙撃を受けて死亡。

悠理は命令を待たずに敵の火力陣地にウェポンステーションで攻撃を加える。その甲斐あって部隊は敵の猛攻から逃れるが、脱出寸前で悠理は足元の亀裂へ落下してしまう。

Phase.2 【The Vivian Girls】

「私はあの子たちの怒りに形を与えただけだ。殺しの技術なんて、それに比べればケーキにかける粉砂糖みたいなもんだよ」

悠理が落下したのは島の地下道だった。相当な高所からの落下であるのに傷一つ追っていない自分に首を傾げる悠理。

地下道の奥深くで悠理は全身白づくめの青年モーリッツに出会う。場違いすぎる格好と奇矯な言動に面食らう悠理だが、彼は出口まで案内してくれるという。半信半疑で悠理はモーリッツの後について歩き始める。

途中、生き残りの部隊が為す術もなく銃火に打ち倒されるのを目の当たりにする悠理たち。打ちひしがれる悠理だが、モーリッツは彼女がなぜ苦しんでいるのか理解できないといった顔をする。

モーリッツに連れられて到達したのは明らかに人の気配がある広大な空間だった。モーリッツ

はいつの間にか姿を消し、そして悠理は自分たちを襲撃した敵――重火器を手にした年端もいかなない少女たちの群れを目の当たりにする。

火力陣地ごと少女たちの仲間を爆砕したことでリンチに遭いそうになる悠理だが、リーダー格の少女はそれを制止する。カチュア、リュドミラの登場。

カチュアは悠理を殺さず連れてくるよう「母さん」に命ぜられたという。カチュアとリュドミラの二人に連行される悠理。メアリ・バーキンズとの出会い。悠理には彼女の挙動から元軍人らしいということしかわからなかったが、メアリは淡々と悠理たちの部隊の人員と装備、弱点、さらには悠理の家族構成まで列挙してみせる。部隊の情報が丸裸になっていることに愕然とする悠理。

メアリは『聖母の嘆き作戦（オペレーション・スターバトマーテル）』と呼ばれる作戦の遂行中であり、悠理たちの部隊を襲撃したのはその第一段階だと言う。その言葉と、ここに来るまで見てきたあまりに多くの死を思い返して悠理は激昂する。だがメアリは動じず「作戦の全貌を知れば、あんたは黙っていても私たちに加わるだろう。それをしないのは、今はまだその必要がないからだ」と呟く。

悠理はメアリに連れられるまま少女たちの暮らす地下世界を歩く。豊かさとは無縁の少女たちの暮らしに動揺を隠せない悠理。

メアリが案内したのは地下からの出口だった。戸惑う悠理に拳銃を渡し、撃ちたければかまわないと囁くメアリ。悠理は震える手で拳銃を構えるが、結局は地下道に消えていくメアリを撃つことができなかった。

救援要請を受けた増援部隊が地下世界に突入するが、メアリと少女たちは既にそれを予想していた。自衛軍の包囲網を突破することに成功した彼女たちは、無数のユニットに分かれて本土への上陸を果たす。

自衛軍はあまりの被害の大きさに公表をためらい「訓練中の事故」と発表するが、メアリはネット上に軍と自分たちの交戦動画を流すことで真相を暴露、軍の信用をさらに失墜させる。誰が言うともなくメアリと少女たちは〈ヴィヴィアン・ガールズ〉と呼ばれるようになり、徐々にではあるが社会的に一定の認知を得るようになっていく。

Phase.3 【Love Your Rage, Not Your Cage】

「命は金で買えます。そして、金は命で買えます」

突入部隊に救出された悠理だったが、それはまた別の悪夢の始まりに過ぎなかった。外出も家族との面会も許可されないまま、尋問まがいの事情聴取を受ける悠理。彼女は尋問者たちの目的が対馬での戦闘ではなく、地下道で会ったあの〈白い男〉であることに気づくが、その時は遅すぎた。昼夜を問わない尋問に心身ともに追い詰められていく悠理。

だが監禁されていた彼女を救ったのはメアリ率いる〈ヴィヴィアン・ガールズ〉だった。施設を制圧すると、メアリは再会を楽しみにしていると言い残し姿を消す。

次に悠理が目覚めたのは軽井沢の避暑地だった。意外な人物との再会――悠理の卒業した

私立礼峰学園スポンサーの孫娘であり、高塔財閥最後の後継者である高塔百合子。百合子の別荘にかくまわれ、心のこもった看護と静かな生活に少しずつ立ち直っていく悠理だったが、何かがおかしいという思いは日ごとに強まる。

回復した悠理は百合子との会食の席で、率直な疑問をぶつける。メアリ・バーキンズとの関係を隠しもしない百合子。微笑を絶やさないまま彼女は語る。メアリの「現役」時代の任務のこと。対馬は大規模な人身売買の拠点だったこと。〈コッペリア〉と呼ばれる国際人身売買ネットワークの存在。彼女に脅迫されたわけでもなく、その逆でもなく、自分たちは互いの必要なものを相手に見出したこと。メアリとの話し合いの結果、人の欲望、それも最悪の種類欲望におもねっている点で〈コッペリア〉は「許すべからざる悪」であるという意見が一致したこと。そして自分もメアリも、刺し違えてでも〈コッペリア〉を壊滅させるつもりであること。

ここにいれば少なくとも安全であると言う百合子だったが、それは悠理の求めているものではなかった。彼女は自分の意思で、自衛軍への復帰を決意する。

一方、都内では〈ヴィヴィアン・ガールズ〉による企業施設・金融商社への襲撃事件が多発していた。警察とは比べ物にならない火力、無数の監視システムを掻い潜る機動力、目標を確実に仕留め、かつ無用な犠牲を出さない情報分析力。世間では徐々に〈ヴィヴィアン・ガールズ〉を（留保付きではあるが）評価する声が高まっていく。

Phase. 4 【The Hollow Men】

「私の顔をよく覚えておくといい。これが君たちの〈天敵〉だ」

悠理の部隊は解体されており、彼女も長期の有給休暇を取ったことになっていた。別の悪夢に迷い込んだような気分新しい配属先、〈新型特殊装備共同運用小隊〉へ向かう悠理。良くも悪くもまるで軍人に見えない上官・棟方志郎中佐と、一癖ありそうな同僚たちに彼女は戸惑う。

一方、メアリの古巣である特殊作戦軍も、証拠隠滅とメアリの「無力化」のために動き出そうとしていた。年齢も国籍もまるで違う、ただ顔立ちだけが薄気味悪いほど似通った男たち。全員が感情抑制措置を受け、次世代型の強化外骨格と試作段階の思考制御兵器を駆使するオペラント&スキナー社製・次世代戦術実験部隊、通称〈うつろな男たち〉が横田基地に降り立つ。

軽井沢の〈ヴィヴィアン・ガールズ〉訓練施設を急襲する警視庁SATだったが、メアリたちはこれを返り討ちにする。だが間髪入れずに〈うつろな男たち〉の攻撃が開始される。初めて受ける不意打ちに苦戦するメアリたち。一時的な撃退には成功するが、多くの仲間と軽井沢訓練施設を失ってしまう。予定していた重火器の搬入も見送ることになり、メアリは作戦の大幅な変更を余儀なくされる。

Phase. 5 【Patriot Games】

「遺憾ながら、高麗統一連邦は高麗統一連邦のために存在しているのであり、日本政府の――さらに言えば、日本の一官僚組織のために存在しているわけではありません」

メアリたちは企業施設襲撃で押収した膨大なデータの海の中からついに〈コッペリア〉の日本国内での最大スポンサーを突き止める。旧日本軍軍人であり、今なお政財界に絶大な影響力を持つ右翼政治家の二階堂宏。治安機関の混乱に乗じ、メアリは二階堂の邸宅に単身での潜入を果たすが、二階堂は老衰で生きた屍と化しており、〈コッペリア〉への支援は息子たちによって唯々諾々と続けられているに過ぎなかった。メアリは冷ややかな怒りとともに二階堂を射殺し、火炎放射器と破碎手榴弾で邸宅を地獄へ変える。

悠理は通常任務と訓練の傍ら、独自の調査を開始していた。高塔百合子ともつながる二人の厄介事請負人、望月崇と相良龍一の力を借りてメアリ・バーキンスの足跡を追う彼女に様々な人物が接触してくる。中国国家保安部の許月鎮、高麗統一連邦国家対外情報院のチョ・リョファン、ボスホート総合警備保障CEOセルゲイ・メルクロフ。そして――メアリの元上官、米特殊作戦軍ノーマン・ロックミス大佐。対テロ戦争の名目で秘かに進められる次世代兵士計画と、それを「大量生産」するための人身売買インフラ。対になる米国防総省と特殊作戦軍主導の「国家規模の不正規作戦」――『聖母の嘆き作戦』、そのおぞましき全貌が、徐々に悠理の眼前で露わになっていく。

Phase. 6 【Fury, Oh Fury】

「笑わないのかい、悠理？ 泣いているのかい？ どうして？」

〈ヴィヴィアン・ガールズ〉の台頭と呼応するかのようになり、都心では警察の対応能力を遥かに越えた、軍用火器による凶悪事件が多発していた。いずれも要求も犯行声明も一切なく、犯人全員が射殺されるまで戦い続けるという異様で前例のない事件。悠理たちの部隊はその鎮圧に度々の出動を余儀なくされる。

つかの間の休日を与えられて繁華街に出た悠理は、そこで予想もしなかった相手――カチュアとリュドミラ、そしてメアリと再会する。

時を同じくして、国籍不明の大型輸送ヘリ数機が東京湾を通過、都心へ向けて猛スピードで接近しつつあった。生に溢れ、死を振りまく者ども――〈死ににくい兵士〉を満載して。

Phase. 7 【The Last Woman Standing】

「お前が這い出てきた血と臓物の海に還れ、メアリ・バーキンス！」

穂摘悠理は事態を収束させるためにメアリ・バーキンスを生きたまま捕らえることを決意する。だがそれは同時にメアリを支援する高塔百合子の告発をも意味する。百合子の関与が明らかとなり、内乱罪が適用されれば最悪の可能性として死刑もあり得る。自分にそれができるのか、出動寸前まで悠理は思い悩む。

そして、メアリの『聖母の嘆き作戦』もまた最終段階を迎えようとしていた。日本国内に存在する〈コッペリア〉8ヶ所の主要施設、及び十数か所の〈ディーリング・ルーム〉のハード・ソ

フト両面からの同時完全破壊。それを実行するために残存する〈ヴィヴィアン・ガールズ〉の全戦力を投入するメアリ。メアリとの密約により日本海で不穏な動きを見せる中国海軍外洋艦隊。メア리를抹殺すべく最後の猛攻をかける〈うつろな男たち〉。そして燃え上がる街へ次々と降下していく〈死ににくい兵士〉。煮えたぎる大釜のごとき様相と化した六本木で、穂摘悠理とメアリ・バーキンスの最後の戦いが始まる。

Final Phase. 【Forever Peace】

「ドラゴンを追う者は自らもドラゴンになる――いずれは君も、それを受け入れるだろう。悲しみでも、諦めでもなく、心の底からの歓喜とともに」

メアリは斃れ、生き残りの〈ヴィヴィアン・ガールズ〉は撤退した。だが平穏は戻らない。メアリ亡き後では自分は少女たちの信頼を失っていると語る高塔百合子は、すでに〈ヴィヴィアン・ガールズ〉は独自の行動を開始していると言う。休まず動き続ける彼女の暴力装置、望月崇と相良龍一。新たなリーダー、カチュアとリュドミラの元に集う新世代の〈ヴィヴィアン・ガールズ〉たち。メアリの負の遺産、日本国内に流れ込む大量の重火器によって引き起こされる困窮した元軍人たちのテロ活動。メアリや〈うつろな男たち〉との戦いで出した膨大な犠牲により定員割れの危機に陥る警察・自衛軍、逆にそれらに代わる第三の治安組織として期待を集める日本版PMSC（民間軍事警備会社）。まるでウィルスのように世界へ拡散していく〈死ににくい兵士〉の生成技術。『聖母の嘆き作戦』のバージョンアップとして動き出す『オペレーション・エウメニデス（慈しみの女神たち）』。その全ての背後で暗躍する〈白い男〉モーリッツ。

悠理は棟方から提案された人体強化手術を、家族の財産・生命の保障と引き換えに承諾する。棟方傘下の研究機関で開発が進められていた通称〈茨冠〉。理論上は空母さえ制御できるという思考兵器制御システム。悠理はわずかなインプラント技術と短時間の訓練で開発スタッフが驚愕するほどの成果を見せつける。戦慄しながらも、何かに憑かれたような表情で呟く棟方。――君を殺す準備ができたよ、モーリッツ。

今の彼女に、少なくとも後悔はない。

太陽の影・ストーリーライン

<http://p.booklog.jp/book/81081>

著者：井田和樹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81081>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81081>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ